

## 高塚洋太郎先生を偲んで

昨年6月8日未明、仏文学科創設以来学科の中心的存在であられた高塚先生が御病気のためお亡くなりになりました。

閑学のキャンパスを歩いていると、杖をついて足を引きずりながら一所懸命歩いておられたお姿と、自転車にのって風のように移動される御病気前の先生のお姿が重なって目に浮かびます。一時期サイクリング部の顧問をされたこともあって、自転車に凝られ、競輪選手が使うような車輪の細いスマートな自転車で甲子園口のお宅から大学に通っておられました。ズボンの裾を縛った姿もさっそうと、顔見知りの学生に会うと「やあ!」と声を掛け、走り去られる。ある日、猪年生まれのためか、のめり込むと猪突猛進、長い下り坂でスピードを出しすぎて転倒、大怪我の憂き目に会われたのです。それでも懲りず、御病気をされるまでは乗り続けておられたようです。家で勉強していて疲れたら、自転車でかなり遠くまで出かけ、喫茶店でお茶を飲んで帰るんですよ、とよく話してくださいました。喫茶店といえば、ケーキ。ケーキがお好きで、先生にケーキをご馳走になった院生は少なくないはずです。また、加藤林太郎先生や院生とともに山歩きも楽しめました。金剛山ハイキングでは道に迷い危うく遭難しかけたり、われわれ教え子たちと先生の共通の体験は少なくありません。

学部では、残念ながら御専門の中世に関する講義はありませんでしたが、大学院では、歴史音声学の講義をなさった年もありました。貴重な講義で、今でも大切にそのときのノートを保管しています。また、現代語の知識があればすぐ読めるようになるとおっしゃって、われわれはいきなり御専門のオック語だけでなくオイル語、アングロ・ノルマン語のテキストを授業で読まされるのです。授業で取り扱われた作品は数多くありますが、アントロジは一度もなく、短編長編にかかわらず、言語学的、文学的、哲学的解説をつけながらじっくり最後まで読むという方式を取り続けられました。たとえば「フラメンカ物語」、「ロランの歌」などはそれぞれに6、7年かかりましたし、最後のテキストとなった「薔薇物語」は1985年10月に始まり、最後の御入院の直前

1996年5月中頃には1万2千数百行までたどり着いたところでした。御病気でここ数年は激痛を耐えながらの授業で、終わってもすぐには立ち上がれないほどお疲れのこともありましたが、先生は「薔薇物語」に、われわれは物語と先生の両方に魅せられ、お互いに授業を非常に大切に思っていました。

その先生がお亡くなりになった今、先生の授業を受けていた現役の学生とわたくしを含む元学生たちは、先生から教えていただいた中世作品を読む面白さ、喜びを味わい続けると同時に、その喜びを少しでも後輩たちに伝えることができるよう勉強を続けています。

教え子を代表し、心より高塚先生のご冥福をお祈りいたします。

伊藤了子